
けいおん! Only our music

sound

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ Only our music

【Nコード】

N6858X

【作者名】

sound

【あらすじ】

けいおん！の2次作品です！

こついう日常系の作品は初めてなので手間取ったりしますが頑張ります！

読みにくいと思いますが楽しんでくれれば幸いです

良ければ感想なども書いてくれたら嬉しいです！

1 出合い（前書き）

ども、soundと申します

この作品を読んで楽しんでくれれば幸いです

それでは早速どうぞ！！

1 出合い

春…それは物事の始まりをイメージさせる季節

桜が舞い散る道路を、俺は歩いていた

『私立桜ヶ丘高等学校』…それが俺がこれから通うこととなった高校の名前だった

俺は先日こちらに引越してきた…まあ、そこから近かったからこの高校受けたんだけど

俺の名前は『あまねみかど天音帝』…世にも珍しい白銀の髪をツンツンに立たせた男の子だ

桜ヶ丘は去年から共学となった元女子高だ…何故共学になったのか、理由は忘れたんだけどね

元々俺でも合格できるレベルの高校だったので、さほど苦もなく合格できた

俺は先ほど立ち寄ったコンビニで購入したブラックコーヒーを飲み干し、近くにあるゴミ箱に放り込む

そんな俺の目に、桜ヶ丘の校門が見えてくる

これがこれから三年間くぐることになる校門か…と思いながら校門をくぐった所で、目の前の女子がハンカチを落とした

「ねえ、君」

ハンカチを落とした事を告げるべく、目の前の黒髪の少女に声をかける

「え！？な、なに！？」

…声をかけただけでここまで怖がられるとは…

内心落ち込むが、ハンカチを拾って砂などをはたき落として

「ほら、ハンカチ落としたよ」

「あ、ありがとう…」

黒髪の少女は恥ずかしそうにそれを受け取ってからお礼を言った

「もう落とさないように気をつけなね？」

「あ、はい！！」

なぜか大きな声で返事を返す黒髪の少女

（ってか青のリボン…同級生だね）

そう考えつつ、「じゃあね」と言ってクラス分けが書かれた表の元に向かう

すでにクラス分けが書かれた表の前には大勢の新入生が集まっていた

「うわ…すごい人だねえ…」

めんどくさいな、と思いつつもこのまま突っ立ってても時間が過ぎて行くだけなので人の少ない所から表の前に回り込むように歩いて行く

「ふむふむ…3組だね」

表で自分の名前を確認した俺は流れに任せて表の前から立ち去ろうとしたが…

「キャッ!」

人の流れに逆らったのか目の前の少女がバランスを崩したので取り敢えず腕を持って支える

「…大丈夫かい？」

「あ、はい。大丈夫です」

その少女は綺麗な金色の髪を持つ少女だった

「表の前に行きたいんだったらあっちの方が安全に行けるよ？こっちは人の流れが昇降口の方へ向かっているから」

「そうですか、ありがとうございます」

穏やかな微笑みを見せながらお礼を言つたとその少女は俺の言つた通りに進んで行つた

それを見送つてから、俺は昇降口へと向かう人の流れに入つた

そして教室

「暇だ…」

すでに教室の中では大勢の生徒がいるのだが…まだ緊張しているの
かなんとなく場の空気が重い

何時もなら本を読むのだが…今日は持つてきていない

「あ、初めまして」

固まってる奴は同じ中学の人なんだろうか…と考えていると隣から
声をかけられた

声の主は茶色の髪を持つ少女だった

「初めまして」

「私は平沢唯っていうんだ…宜しくね」

「僕は天音帝だよ」

俺が名前を言うと、なぜか平沢さんは「うーん…」と唸った後

「じゃあ、みーくんだね!!」

「…何それ」

「あだ名だよ」帝だからみーくん!!」

…似合わないな

「やめときな、俺には似合わないから」

苦笑いしながら平沢さんに言う

「えゝ？みーくんはみーくんだよ！！」

…どうやら変える気はないらしい

「唯？と…だれかしら？」

どうするべきか悩んでいると俺の後ろから声が掛けられた

「あ、和ちゃん♪」

平沢さんが名前を呼んだ。どうやら知り合いらしい

俺に声をかけた——平沢さんには和と呼ばれていた——は
眼鏡をかけた女子だった

「こちらは先ほどお友達になった天音みーくんです！！」

「いや違うから…天音帝だよ。宜しくね」

平沢さんの間違った紹介にげんなりしながら正解の自己紹介をする

「私は、真鍋和。唯とは幼馴染よ」

「そうだよー和ちゃんは私の親友なんだー♪」

「そうなんだ…良いね♪」

俺にも幼馴染と呼べる人はいたが…まあ昔の事だし覚えてない

平沢さんの自慢に笑顔で返ししながら考える

（どんな名前だったっけ…？）

1 出合い（後書き）

いかがだったでしょうか？

まだまだ読みにくい所もありますが、間違いなどありましたらご指摘ください

感想なんかもくれればうれしいです

それでは

2 軽音楽部（前書き）

2話目です！

それでは早速どうぞー！

2 軽音楽部

入学式から2週間後：俺が教室に入ると俺の隣の席の平沢さんが唸っていた

「何唸ってるの？」

「あ、みーくん！えっとね、何の部活に入ろうか迷ってるんだあ」

そういう平沢さんの机の上には部活動申請紙が置いてあった

「もう入学してから2週間経ってるよ！？」

「こっやって二トが出来あがって行くのね…」

「うわ！？真鍋さん！！？」「和ちゃん！？」

いつの間にか俺の後ろには真鍋さんが

「って、部活やってないだけで二ト！！？」

「それは酷いんじゃない？」

苦笑いしながら真鍋に言う

恥ずかしながら俺も帰宅部だ

はがないみたいに隣人部作ろうかな…？

そんな事を考えていると、

「そんな事はないわ…この子は今まで何もやって来なかったんだから」

はあ…とまるで手間のかかる子供につくようなため息を出す真鍋さん

「????」

張本人の平沢さんは頭に大量のクエスチョンマークを浮かべていた

と、そこである事を思い出す

「一時間目の音楽の担当って、平沢さんじゃなかったっけ？」

「あ、そうだった!!忘れてた!!」

そう言い教室から飛び出していく平沢さん

「…本当に大丈夫かしら」

「何とかなるでしょ」

マジで落ち込む真鍋さんを慰めながら言う

「…人間、思わぬ方向に才能が眠ってたりするものなんだよ?」

そしてその日の昼休み

「取り敢えず、軽音楽部つてところに入ってみました!!」

「行動早いなオイ」

突然のカミングアウトに俺と真鍋さんは呆れている

「どんな事をするか分かってるの？」

「ん〜？軽い音楽って書くから簡単なことしかやらないよ〜」

「たとえば？」

俺の質問に平沢さんは「うーん…」と朝と同じように唸って

「口笛とか？」

「「何そのやる気のない部活…」」

思わず真鍋さんとセリフが被る

「軽音楽部って言ったら…ギターとかじゃない？」

「ぎ、ギター！？わ、私、カスタネットしかできない…」

「スゲーよく似合うよ」

俺の脳内に『うんたん♪うんたん♪うんたん♪』とカスタネットを叩いている平沢さんの姿が思い浮かぶ

「ど、どうしようみーくん…」

「うーん…っ！？もしかして申請用紙出しちゃったの!？」

「うん」

その言葉に、俺と真鍋さんはため息をつく

「…直接やめますって言に行くしかないんじゃない？」

「ええ!?!…それしかないか…じゃあ、みーくんついてきて!」

「ああ…うん、良いよ」

断ろうと思ったが平沢さん一人で向かわせれば結果は悲惨な事になると思うので俺も付いて行く事にする

「真鍋さんはどうする?」

「私は生徒会に入ってたから…時間が無いわ」

流石知的な眼鏡タイプの真鍋さんだ

そんなこんなで俺と平沢さんは放課後に軽音楽部の部室…音楽室に行くことになった

2 軽音楽部（後書き）

誤字脱字などありましたらご指摘ください！

それでは！

3 入部！

そして放課後

「ここか…」

俺達は今居るのは音楽室の扉の前

「入ったばかりで言いくいけど…やっぱりやめますって言っ…！」

「頑張ってね？」

苦笑いしながら平沢さんに言う

「…軽音楽部ってどんな人がいるのかな？」

「うーん…ポスターを見る限りじゃ女の子じゃない？」

文字が丸くて綺麗だったし

「はっ…！もしかして、『ただでやめれると思ってんのか…！』『ゴートゥーヘル…！』みたいな事言われたりして…！」

「何時のバンドだよ」

あわわわ…と焦る平沢さんに笑いながら言う

と、不意に俺達の肩に手が置かれる

「ひいつ!？」

「いやそこまで驚かなくても…」

過剰に驚く平沢さんに呆れつつも手を置いた奴の正体を探る

手を置いたのは、でこを出したカチューシャ女だった

そいつは平沢さんの事を見るなり

「あ、テンポ悪くて使えないドジっ子!!」

「初対面の相手によくそんな事が言えるね…」

こちらも大胆にカミングアウト、

「うちの部前で何やってるの？」

びつくりした…と呟く平沢さんに変わって俺が説明しようとするが

「あ、もしかして入部希望の平沢唯さん!!?」

と、俺を指差す

「どう考えても女の子の名前でしょ？平沢さんはこっちだよ」

まだ何かブツブツ言っている平沢を前に出す

「ギターがすごく上手いんだよね!？来てくれるの待ってたよ!!」

（（なんかあらぬ尾ひれがついてる！？））

愕然とする俺達の事も気にせずカチューシャは、

「ん？じゃあそっちは入部希望者！？」

「いや、俺は平沢さんの…「おい！！入部希望者が来たぞ！！」…聞けよ」

思わず殺気が出そうになるが抑える

「本当か！！」「歓迎いたしますわ〜♪」

音楽室の中には黒髪的女と金髪的女がいた

つてかこの二人は…

「「「入学式の時の！！」「」」」

俺達三人は互いを指差した

「え？みーくん知り合い？」

「いいや…入学式にちよつとね…」

何故この二人が軽音部に居るんだ…？

「まあ良い！！取り敢えずムギ、お茶の準備だ！！」

「はい！！」

「ど、どうしよう!?!やめるって言いつらいよ!?!」

「(タイミングを探るしかないね…)」

小声で作戦会議をしていると、

「さ、座って座って!!!」

カチューシャに背中を押されて、席に着かされる

「いやー助かったよ!!実は先輩たちがやめちゃってこの部3人しかなくてさ」

…ん?この学校の部活の最低人数は4人だったような気が…

「1週間以内にあと一人入部しないと廃部する所だったんです」

と、金髪の女が嬉しそうに言う

「本当に入部してくれてありがとう!!!」

「(ますます言いつらい!!!)」

本気で頭を抱えそうになる

「平沢さんはどんな音楽やりたいの?」

今まで発言しなかった黒髪の女が聞いてくる

「えつと…」

「好きなバンドは？」

「ええ！？」

「好きなギタリストは？」

黒髪の女の質問に乗り、他の2人も聞いてくる

「（さっさと言え！！）」

小声で平沢さんに言うところりと頷き

「じ、じ、じっ」

「ジミー・ヘンドリックス？」

平沢さんが切り出す前に黒髪の女が、

「ちがつ、じっ、じっ、じっ！！」

「ジェフ・ベック？」

平沢さんが言いきる前にカチューシャ、

「どなた？」

疑問を持ち、カチューシャに聞く金髪の女

（こいつ等話を聞く気がさらさら無エ！！）

平沢さんはぐったりしている…

それを気にも留めずに黒髪の女が、

「ロックギタリストには二種類しかない 『ジェフ・ベックとジエフ・ベック以外だ』 って言われている 常に新しいサウンドを追求する挑戦的なギタリスト！」

詳しいですね…黒髪

俺が思うと同時に金髪の女も、まあ！と驚く

俺が感心していると3人はこちらを向き

「なあ、名前なんて言うんだ？」

「…天音帝だよ」

「じゃあ天音はどんな音楽やりたいんだ？」

ここでズルズルと入部するのも嫌なので…

「…俺入部希望者じゃないよ？」

カミングアウトする

「「「え…？」」」

3人の時が止まる…

「ええ!？」

そしてカチューシャのひときわ大きな声で再び時が流れ出す

「だって一言も入部希望だ、って言っていないし」

「いや言っ——言っていないか…」

「律!!」

突然、今まで大人しかった黒髪の女がカチューシャに拳骨を落とす

「痛い!!」

「わ、私も!入部取り消してくださいに来ました!!」

俺のカミングアウト時の収集もつかない時に平沢さんもカミングアウト

「「「え…?」「」」

そして二度目の停止

(流石は天然…)

セカンドインパクトを引き起こした張本人はキョトン、としている

「もっと違う楽器をやるんだと思って…」

「じゃ、じゃあ何ができるんだ？」

カチューシャが復活し、平沢さんに質問する

「カスタネ……ハーモニカ！」

（見栄張りやがったコイツ……）

一方、カチューシャは…

「あ、ハーモニカならあるよ、吹いてみて」

と、制服のポケットからハーモニカを取り出して見せるカチューシャ

「ごめんなさい吹けません！！」

潔く頭を振り下ろす平沢さん

何故ポケットからハーモニカが出てくるんだ…？

「でも、うちの部活に入ろうって思ったって事は音楽に興味はあるんだよね？」

黒髪の女の質問に

「他に入りたい部活とかあるの？」

金髪の女の質問が加わり、平沢さんは

「うつん…特には」

その言葉で3人の目に光が現れる

（あきらめない、か…）

そして話題が無くなったので、音楽室に静寂が訪れる

「ほ、本当にごめんなさい…それじゃ」

「ああ！もうちょっと待って！！」

「もう一杯お茶いかが？」

カチューシャと金髪の女が平沢を引き止めにかかる

「でも…」

平沢さんが一瞬渋るが

「クッキーとマドレーヌもあるの！！」

「うつん」

あっさり陥落

（物につられんなよ…）

しかしすでに平沢は席に座ってお菓子をいただいていた

「はっ!?!…すいません、こんなにご馳走になるつもりじゃ…」

「良いの良いの」

「毎日こつやつて、一緒にお菓子を食べましょう」

この言葉に黒髪の女が

「いやそれ軽音部じゃな——っ!?!?」

正論を言おうとしたが何故か言い止まる

(机の下で足ふんだな…カチューシャが)

同じ軽音部の仲間じゃないのかね…?

「平沢さんはどんなものが好き?」

「可愛い物なら何でも」

「休みの日は何してるの?」

「家でゴロゴロ…かな?」

「苦手な物は?」

「暑いのも寒いのも苦手なんだあゝ 冬は炬燵に籠りっぱなしだし
夏は床の上を転がってばかりいるの」

「」「」……………」

流石は天然…少しの質問で3人をここまで黙らせるとは

「…あの…それじゃあ…」

帰るタイミングを見つけた平沢さんが席を立つ

「ま、待って！！行かないで、お願い！！」

「もつと美味しいお菓子持って来ますから！！」

必死に止める二人

平沢さんがやめたら廃部だものね…無理もない

それを見た平沢さんが何を言うか見ていると、涙腺が緩み始めた

「ごめんなさい…私が軽い気持ちで入部するっていつから…期待させるだけさせて、なんて謝ったらいいかあ…」

そして泣きだす平沢さん

「わ、ちょ、泣くなつて！！」

俺が必死に止めるがその頃3人は

「私達こそ…ゴメンなさい…」

「無理に引き止めて悪かったな…」

「ゴメンな…」

罪悪感を感じたのか、謝り出す3人

（謝るならこつちを止めてくれよ…っと、使えそうなものは…）

俺は部室を見渡す…と、俺の目に良い物が飛び込んできた

「オイ、3人とも」

「な、何!？」

カチューシャが反応する

「なんか演奏できるの？」

「え!？あ、うん!!」

黒髪の女の返事を聞いて

「俺が平沢さんを泣きやますから、演奏できるようにしてくれない？」

「わ、分かった!!」

俺がそういうと3人は準備をするべく楽器の元へ向かう

「オイ、平沢さん」

「うっ、ぐすっ…何？」

涙を拭いて俺の方を見る平沢さん

「今から軽音部の人達が演奏してくれるってさ」

「本当!？」

さっきの泣き顔が嘘のようにキラキラした笑顔に変わる

「(あれ?泣きやんだぞ...?)うん、だからほら、あそこに座って」

俺は平沢さんの背中を押して席に座らす

カチューシャにアイコンタクトで始めろ、と伝える

俺の意図が伝わったのか、カチューシャは頷いてスティックを上に掲げて

「ワン・ツー・ワン・ツー・スリー・フォー!!」

たった一人の為のライブが、始まった

演奏曲は『翼をください』だった

3人の演奏は拙いものだったが、それでも何か引かれるものを感じた

(…走り過ぎてるが力強いドラム、しっかりとリズムを刻むベース、
軽快な音を奏でるキーボード…)

そして何より

(随分楽しそうに演奏してるねえ…)

演奏している本人達が、一番楽しそうなのである

聞いているただ一人の観客…平沢さんも楽しそうな顔をしていた

そして、短いライブが終わる

「うわあ〜」

拍手をしながら平沢さんが立ち上がる

「あー…その、どうだった？」

照れくさそうに、カチューシャが聞く

「なんて言うか…すごく言葉にし辛いんですけど…」

「うんうん!」

後ろに居る黒髪の女たちも興味深そうに平沢さんを見る

そして平沢さんは、とてもいい笑顔で

「あんまり上手くないですね！！！」

「「バツサリだ！！？」」

まさかの天然爆弾の投下で、思わずカチューシャと言葉が被る

「でも、楽しそうな雰囲気伝わってきました！私、この部に入部します！！」

俺は演奏を聞いていた時の平沢さんの表情からそんな気がしていたので驚かなかったが、カチューシャたちは受け入れられなかったらしく、黒髪の女と互いの頬を引っ張り合って…

「「痛い！！」」

ごく当り前な声を上げた後、

「バンザイ！！」

「ありがとう！」

「これから一緒に頑張ろう！！」

喜ぶ4人を尻目に、ここから立ち去ろうとするが

「待って！！」

「行かないでみーくん!!」

「うお!? 気配だけで察知された!？」

動き出す前に、平沢さん&カチューシャに止められる

「…何かな？」

いやな予感しかしないが、何も言わずに振り切るのも無礼なので取り敢えず返事をする

「みーくんもやろうよ!!」

「今なら副部長の座が空いてるぞ?」

平沢さんの強引な誘い&全く嬉しくもなんともない情報を提示する
カチューシャ

「…ハア…」

なんとなく、こんな感じになるのは分かっていた…分かっていたが、実際にこうなるとため息が出る

「…仕方ない、か…分かったよ」

俺は右肩に掛けていた薄っぺらい鞆から部活動申請用紙とシャープペンを取り出して、紙に走らせる

「…ほら」

「みーくん!!」

「お!!...!!という事は?」

笑顔で聞いてくるカチューシャ

「...早く取らないと帰るよ?」

「ああ!!分かった!!分かったから渡してくれ!!」

懇願するカチューシャに俺の名前と入る部活の欄に軽音部と書かれた紙を渡す

「明日からよろしくな!!」

「はいはい...」

俺が気だるく返事をするカチューシャが

「じゃあ、部活動開始記念に写真撮ろうぜ!!」

「あ、それ私のカメラ...」

おそらく黒髪の女の所有物なんだろう、そんな声を出していた

つかいつ盗った?

「撮るよー?」

いつの間にか、俺の周りに全員集まっていた

俺が気付くと同時に、シャッターが切られる

カシャッ！！

写真には、見事に額から上しか映っていないカチューシャ

恥ずかしがっているのか、若干顔が赤い黒髪の女

笑顔でピースしている金髪の女

少し戸惑いながらも金髪の女と同じくピースする平沢さん

そして若干驚いている俺が映っていた

写真を撮り終えた後、平沢さんが思い出したように

「あ、でも私楽器できないし…あっ！！マネージャーとかならどうかな！？」

「運動部じゃないよ…ここ」

びつくり発言をする平沢さんに俺がツツコミを入れる

「二人とも入部と同時に、ギターを始めたらどうでしょうか？」

「お、良いなそれ！！」

金髪の女の提案にカチューシャが賛同する

「天音もギターで良いか？」

「…俺ギター弾けるよ？」

俺の発言に…

「」「」「ええ！？」「」「」

良いリアクションで返す4人

「ちなみにドラムも少しなら出来るよ」

「先に言え！！」

「聞かれてないから」

苦笑いしながら言う

「人って、どこに才能眠ってるか分からないんだね！！」

（…あれ？俺がそのセリフ言ったような…？）

これが、俺の人生を大きく変えることとなる…桜ヶ丘高校軽音部との出会いだった…

3 入部！（後書き）

取り敢えず1話分は終了です

誤字脱字などあればご指摘ください！

それでは！

キャラクター紹介（前書き）

帝の設定紹介です

キャラクター紹介

キャラ設定

名前 天音 帝 《あまね みかど》

身長 173cm

体重 60Kg

性格 温和、滅多に怒らない。少し天然

好きな物 ギター、ブラックコーヒー、コンソメスープ

嫌いな物 甘い物（90%以上駄目）、不良、ブラック以外のコーヒー

趣味 人間観察、ギターを弾く

家族構成&家 妹・父 一戸建て

備考

今作の主人公、あだ名はみーくん（平沢のみ）何事も冷静に観察するタイプの人間。美少年の部類に入る。（人によっては女の子に見えるらしい）

髪色は世にも珍しい白銀をしており、いつもはそれを立たせている運動神経抜群で、中学時代には全ての部活に助っ人を頼まれ、全ての部活が県大会に出場したという記録を持つ

勉強の方も天才で、まったく勉強していなくとも90点台を余裕で

取れる

家庭では家事全般をこなす

部活内でのポジションは、ツツコミだが、時々平沢の様な天然発言をする

ギターはSterling by Music Manを使っている

何時も十字架の首飾りを着けている

額に過去に不良に絡まれた際の傷を持つ

去年の5月に前住んでいた桜ヶ丘に引っ越してきた

小さいころに幼馴染がいたらしいが、憶えていない

母は既に他界している

その事で時々シリアスになる事がある

イメージC V 木村良平（僕は友達が少ない 羽瀬川小鷹役）

4 朝早く

軽音部に入ることとなった翌日の朝、

俺は起床した瞬間、目の前に漆黒のギターが見えた

ミュージックマンと呼ばれるギターだ。親父からもらった

親父が使ってたわりには傷はほとんどなく（しかし少しはある）とてもいい状態だった

昨日弦を張り替えた後、そのまま寝てしまったらしい

時間を確認すると、現在時刻7時10分

「朝飯作るか…」

取り敢えず部屋を出て、階段を下りてキッチンに向かう

冷蔵庫を開けて、中から卵など料理に使うものを取り出す

この家には俺と今年で中学3年生の妹しかいないので料理担当は必然的に俺になる

母は既に他界しているが、親父はイタリアで仕事をしている

…ここだけの話、俺はあまり親父の事が好きではない

俺の母は…まあ、優しい人だった

だが親父との記憶はあまりない

俺が物心ついたところからあの人は世界を飛び回っていて、帰ってくるのは数年に一度

そうなれば必然的に好きになるはずもない

と、そう考えているうちに朝飯の完成

白ご飯に味噌汁に目玉焼き、ベーコンといった簡単4点セットだ

取り敢えず朝飯が出来たので妹を起こしに行く

階段を上がり、俺の向かいの部屋のドアを開ける

「七海ー？朝だよ、起きな」

言うだけでは起きないので布団を剥ぎとる

「…ううーん…あしや？」

布団の中から現れたのは俺とは違い綺麗なブロードヘアーで綺麗な顔立ちをしている少女

コイツの名前は天音七海、俺の妹である

「朝だ、顔洗って来な」

朝をまともに言えないという事は夜更かししてたなコイツ

「ふぁーい…」

眠いのか眼を擦りながら、何時も持っているウサギのぬいぐるみを持って洗面所へと向かう七海

小さいころに俺が作ってやったウサギのぬいぐるみを今でも大事に持っている

物を大事にする事は良い事だね、と思いながら作った料理を並べる

並べ終える頃、顔がシャキツとした七海が来た

「お兄ちゃんおはよう」

「おはよう七海、さ、早く食べちゃいな」

俺の言葉に従って席につき、「いただきます」と言って食べ始める
七海

「お兄ちゃん昨日ギター出してたけど何に使うの？」

「ん？…ああ、俺軽音部に入る事になってね」

「ふーん…」

七海はたいして興味もなさげに返事を

「…って、ええ！？お兄ちゃんが部活！？」

…まだ寝てるのかな？

まあ、驚くのも無理はないだろう…俺は中学で部活なんてしなかったし

「まあね、そう言えば七海の方は順調なの？」

コイツはバスケット部に所属している…そこそこ強い

「うん、お兄ちゃんのアドバイス通りやってるから、練習試合では4連勝中だよ！！」

こちらへ向かってピースする七海

「そういえば最近行ってないな…久しぶりに行ってみようかな？」

「うん！皆も喜ぶから来てよ！！って、新しいコーチが来たんだよ、そう言えば」

「そっなの？…良い人なのか？」

「さあ？まだ分かんない」

ここで時間は7時50分、俺達は同時に「ご馳走様でした」と言つて、俺が皿を洗う

「七海は朝練だろ？先に言つてて良いよ」

「うん！ありがとうお兄ちゃん！！」

「勉強もがんばりなね」

玄関を飛び出していく七海を見送り、皿洗いを済ませた後、自室へ行って制服に着替える

今日はいつもより荷物が多い…ギターが増えるからだ

さらに今日はギタースタンドもある

「あ、部室におけるかな…？」

流石に教室に置くのも悪いので部室においておくか

取り敢えず早くに言った方が良さだろう、と思い家を出て、鍵を閉めた後歩きだす

これから3年間歩くこととなる…って入学式の時にも思ったな、と思いつつ俺は通学路を歩く

耳に着けているヘッドフォンからはお気に入りの音楽が入っている

俺がギターを始める事になるきっかけを作った曲だ

その曲を聞きながら、先ほど購入したブラックコーヒーを飲む

俺の薄っぺらい鞆には、同じ種類のコーヒーの缶が5個ぐらい入っている

昨日までは3個（登校時、昼飯時、下校時）だったが、今日からは部活があるので2個追加した

…まあ、ここまでの会話で分かんと思うが俺はコーヒー好きである
（ブラック限定）

甘い物はなんというか…食べれない

クッキーだけなら何とかなるが…チョコの類はダメなんだよねえ…

と考えているうちに桜ヶ丘に到着

さて…部室へ行くか

ガチャン

「あれ？」

俺が扉を開けようとするとカギが閉まっている事に気がついた

「うーん…」

時刻は8時10分、

授業開始時刻は8時30分、

普通に職員室にカギを取りに行っても間に合うが…

「めんどくさいなあ…ピッキングするか」

俺は制服から安全ピンを取り出してそれを真っ直ぐに伸ばす

少しカチャカチャとやれば…

カチン、と言う音と共にカギが外れる

「簡単だね♪」

そして音楽準備室内に侵入

ギタースタンドを入れてきた袋から出してギターを立て懸ける

と、そこで軽音部室のドアが開けられた

「あれ…？開いてる…？」

入ってきたのは昨日の黒髪の女だった

「おはよう」

俺が軽くあいさつすると

「きゃあ！？」

随分と可愛い悲鳴を出してすっごい避けられた…

「あー…随分と嫌われたもんだねえ」

「あ、いや…そんなつもりじゃ」

俺がポツリと呟くと逆に申し訳なさそうに謝ってきた

「…冗談だよ。そういえば名前を聞いてなかったね」

「あ、秋山です…」

「秋山さんか…これからよろしくね」

笑顔で返すと、なぜか秋山さんは顔をそらしてしまった

（…恥ずかしがり屋なのか？）

一瞬その考えがよぎる…が、恥ずかしがり屋ならバンドを組もうな

んて思うか？

「ね、ねえ！」

「ん？」

考え事に浸っていると秋山さんから声をかけてきた

「天音君って利き腕どっちなの…？」

「両利き…だけど？」

何故そんな事を聞くのか、と考えてから昨日の事を思い出す

（そう言えば…確かベースを…）

「もしかして、レフティ？」

「う、うん…」

なるほど、だから利き腕か

「俺はどっちでも弾けるよ。ギターも両方あるし」

「そうなんだ…左利きの人って少ないからさ、天音君はどうなのか
なって…」

…と言う事は

「…俺、左で弾いた方が良いの？」

「い、いや！！弾きやすい方で良いよ！！」

なぜかあわてて否定する秋山

と、不意に声が聞こえた

「漣？」

「律？」

聞こえてくる声は昨日聞いた事のある声だった

確か…カチューシャだ

そこまで考えた時、ドアから昨日見たカチューシャが現れる

「どうしたんだ？律」

「いや、なかなか漣が教室にこないからさ、探しに来たんだ…お、天音じゃんか」

「おはよう」

名前を知らないので取り敢えず挨拶だけしておく

…と言いかちゃんと自己紹介すべきだと思っただ、うん

と考えているとチャイムが鳴る

「あ、ヤバ…ほら漣！早く行くぞ！！」

「うん、あ、天音君も」

「ああ…今行く」

俺は入口の所で待っている秋山さんとカチューシャの元へ走って行った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6858x/>

けいおん! Only our music

2011年11月16日11時09分発行